



GRL NEWS

名古屋大学
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
第1号

2018年1月発行

GRLの開館を記念して

11月1日 名古屋大学 GRL がオープン

2017年11月1日、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（略称：GRL）がオープンしました。オープンに先立ち、名古屋大学と公益財団法人東海ジェンダー研究所共催による「名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）開館記念式典」が、2017年10月31日（火）、GRLにおいて挙行されました。当日は晴天にも恵まれ、GRLの門出にふさわしい一日になりました。

式典には、来賓として、内閣府男女共同参画局長の武川恵子氏、文部科学省生涯学習政策局長の常盤豊氏、国立大学図書館協会会長・東京大学附属図書館長の久留島典子氏、国立女性教育会館理事長の内海房子氏をはじめ、学内外から約70名が出席しました。

式典の挨拶で松尾清一総長は、日本におけるジェンダー研究の新しい境地を切り開く拠点施設となるよう創設の意義を語り、来賓からは、研究者の育成とともに、全国の研究機関、図書館との緊密な連携の

と、男女平等意識の啓発、推進などへの期待が寄せられました。

1階図書スペースには、東海ジェンダー研究所より寄贈された約2万冊とアーカイブのうち、開館時には約1万2千冊が配架されており、ライブラリの核となる「水田珠枝文庫」は、研究者個人の足跡に留まらず、日本におけるフェミニズム史の軌跡をたどりうる場となっています。

内覧会参加者は、図書のラインナップを眺めつつ、思い思いに本を手にしたたり、「水田珠枝文庫から」と題された貴重書の展示（11月1日（水）～11月30日（木）まで開催）や、エントランス正面に描かれた「フランス人権宣言」とオランプ・ドゥ・グージュによる「女性および女性市民のための権利宣言」などに見入っていました。

11月1日のオープン以降も、GRLには学内はもちろん学外からもたくさんの方が訪れています。



記念式典でのテープカットの様子。左から國枝秀世、常盤豊、松尾清一、西山恵美、武川恵子、久留島典子の各氏。



GRL 図書室の様子。

「GRL NEWS」の創刊に寄せて

西山 恵美

「名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ」(GRL)が開館して2ヶ月ほどしたある日、ふらりとここを訪れた。地下鉄名城線「名古屋大学」下車、1番出口のエスカレーターで地上に出てそのまま歩くと、林の中になんが色の建物が見えてくる。右手の階段を数段上がるとドアが開き、「カフェ・ブラン」からのコーヒーのにおいに誘われてさらに進むと、右手に小さなガラスのドアがあり、これを手で開けると、そこが図書館で、左手に受付がある。数人が書棚の本を手にとったり、窓ぎわの赤い椅子に腰掛けて読書したりしていて、小部屋には何人かの姿が見えるがガラスのドアに隔てられて声はほとんど聞こえない。奥にもう少し大きな小部屋があり、書棚に囲まれて机と椅子が並び、ドアがあり、外で読書や書きものをする人の邪魔にならずに対話や議論もできる。

書棚はまだ十分に埋まってはいない。というのは寄贈図書のうち6千冊ほどは登録作業中のためである。しばらく書棚を眺めた後、奥の「水田珠枝文庫」の部屋を受付の人に開けてもらい中に入ると、古い図書から比較的新しいものまで7千冊ほどが、洋書と和書に分けてずらりと並んでいる。窓ぎわに置かれた3つのキャレルは座り心地がよく、左手の窓からは木々や人通りが見える。

このようにこじんまりした図書館だが、登録作業が終われば蔵書が2万冊余りとなり、毎年増やしていく計画である。書棚の奥にはこの図書館の特色の一つ、「アーカイブ」室がある。また、この図書館のもう一つの特色は、ジェンダー研究の進展のため、国内外の人々によるジェンダーについての多様な対話や議論の場を提供



する目的で、先の二つの小部屋と共に2階にも「レクチャー・ルーム」、「会議室」、対話のためのテーブルなどが設けられていることである。アーカイブと対話・議論の場は、ロンドンの二つの女性図書館からヒントを得たもので、今後これらの目的にかなった活用が望まれる。

東海ジェンダー研究所は、名古屋大学と連携してGRLが利用する皆さまに長く愛されるよう、これからも支援を続けたいと考えている。

(公益財団法人

東海ジェンダー研究所・代表理事)

企画展示の記録

「水田珠枝文庫」から

GRL開館後の最初の展示では、日本におけるフェミニズム研究の碩学でもあり、社会思想および政治思想の分野から長年女性史について研究されてきた水田珠枝先生寄贈の貴重書を公開しました。展示されたのは、M・ウルストンクラフト『人間の権利の擁護』(1790年)の初版本、同じくウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』(1793年)、またアベラールとエロイーズ『アベラールとエロイーズの手紙』(1783年)と『アベラールとエロイーズの手紙に関する19世紀の研究書』(1839年)です。いずれも非常に貴重な研究書であり、GRLの水田珠枝文庫とあわせて、水田珠枝先生のこれまでの研究の足跡をうかがわせる展示としました。(展示期間 2017.11.01~30)



水田珠枝文庫
Mizuta Tamae Library

水田珠枝文庫について

水田珠枝文庫は、GRL1階図書室の奥にあります。受付でお手続きをいただければ、どなたでもご利用・ご見学が可能です。(水田珠枝文庫所蔵の図書については、貸出はおこなっておりません。)

大学院教育とジェンダー研究

田村 哲樹

大学での教育には学部生向けと大学院生向けがある。私にとって、大学院での教育はとても大切である。名古屋大学は研究機関であり、大学院での教育を通じて新たな研究を担う人材を育てることが期待されているからである。また、各自の研究を深めつつある大学院生たちの指導を通じて、私自身が新たな知見やアイデアを得ることもある。

しかし、大学院授業の文献講読をどのようなテーマで行うかは、毎年の悩みの種である。私の指導院生の研究テーマは多様だ。グローバルな正義について政治哲学的に考察する院生もいれば、現代日本政治の再検討を試みる院生もいる。だから文献の選択は悩ましい。院生の多様性に完全に応えるような文献を選ぶことはできないからである。

そんな悩みの中、今年度は、ジェンダー関係の文献を読むことに決めた。その主な理由は、ジェンダー関係のテーマで研究をやりたいという大学院生が一度に3名も入ってきたからである。「ならば、今年度はジェンダーで行こう」と決めたのである。

前期は、Johanna Kantola & Emanuela Lombardo, *Gender and Political Analysis*, Palgrave, 2017 を読み、後期は主に、Georgina Waylen et al. (eds.) *The Oxford Handbook of Gender and Politics*, Oxford University Press, 2013 の中から論文を選んで読んでいる。前者は、政治学におけるジェンダー研究を「ジェンダー」の理解の違いに沿って類型化した上で、ジェンダー研究の主要な概念や論点が各タイプの研究でどのように扱われているかを整理した本である。

後者は、オックスフォード大学出版会の定評あるシリーズの一冊で、文字通り「ジェンダーと政治」に関するトピックが網羅的に取り上げられている。

これらを読むと、政治学におけるジェンダー研究の現在の到達点と今後の展望がよくわかる。授業参加者は恐らく、当初予想以上に政治学においてジェンダーの視点からの研究が様々な形において行われていることに気づいたはずである。うまくいけば、ジェンダー関連研究の3名以外の院生たちにも、何らかの波及効果が出てくるかもしれない。大学院教育の楽しみなどところである。

(名古屋大学法学研究科・教授)



シリーズ：私の研究紹介 1

炭鉱で働くのはだれか

——ジェンダー的視点が照らし出す——

奥村 華子

みなさんは「炭鉱」と聞くとどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。世界遺産登録で話題になった施設群や「軍艦島」、あるいは石炭によって駆動する蒸気機関車を懐かしく思い起こされる方もいらっしゃるかもしれません。かつて人々の生活の基盤を支えていたエネルギー生産業の根底には、当然のことながら労働者の人々がいます。私の研究は、近現代の日本文学や映画、写真などにおける炭鉱の表象を検討することで、男性だけでなく女性や子ども、外国人の方々の労働や生活の有様を“掘り起こす”ことを目的としています。

昨今炭鉱という労働の場が注目を集める一方で、そこで働いていた人々の姿は「炭鉱労働者」としてひとくりに捉えら

れる傾向があります。しかし炭鉱労働は、子どもを含む家族で行われることもあり

り、女性労働者は1933年に坑内労働が禁止されてからも敗戦直後まで存在していました。

戦前には、自身も鉱山出身である松田解子がひろく鉱山全般における女性の労働と性について問題提起を行いました。戦後には、森崎和江が実際の女性労働者に取材した聞き書きを出版しました。いわば、社会から隔離した炭鉱という空間に生きる人々の苦しみを、女性の問題として、時間と空間を越えて分かちあおうとする取り組みがあったのです。炭鉱周辺の共同住宅で暮らす人々にとって、労働の場と生活空間は密接に関係するものでありながら、女性には女性の、子どもには子どもの、朝鮮人や中国人の方々には朝鮮人や中国人の方々の生活と苦難がありました。学際的かつ文化的なア

プローチから、日本人の、屈強な男性像としてだけでは語りえない炭鉱労働者の人々の物語を読み取ってみたいと思っています。

ジェンダー・リサーチ・ライブラリには、フェミニズムやセクシュアリティ理論に関連する書籍のほか、先述の女性知識人による図書や、炭鉱の女性労働者のインタビュー付の写真集なども所蔵されています。既存の枠組を疑い、脱構築することで、他者や自身の新しい姿を獲得する、そのための「知の拠点」に携わることは、自身の研究を深めるための灯火になってくれると感じています。

(名古屋大学人文学研究科・D1)



◆◆催し物のお知らせ◆◆

GRL 開館記念講演会：「女性史の過去と未来」

日時：2018年3月24日（土）（13時30分～17時30分）※13時受付開始

会場：名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ 2Fレクチャールーム

参加費：無料（事前申し込み不要）

言語：英語（日本語通訳あり）

その他、コット教授を招いた一般公開セミナーもGRLにて開催予定です。詳細は随時GRLのホームページにて更新されます。

URL: <http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>

・3月27日（火）「図書館とジェンダー（仮）」（13時30分～、通訳あり）

・3月29日（木）「結婚と家族制度（仮）」（13時30分～、通訳なし）

・4月4日（水）「セクシュアリティとジェンダー（仮）」（13時30分～、通訳なし）

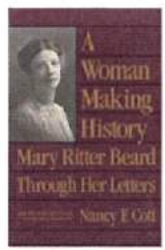
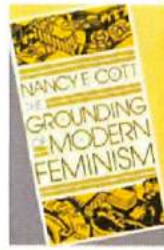
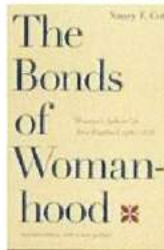
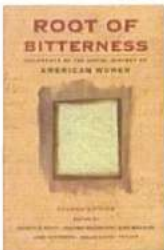


ナンシー・F・コット教授 略歴

1945年、アメリカ・ペンシルベニア州生まれ。

イエール大学教授を経て、現在、ハーバード大学 Jonathan Trumbull 教授（アメリカ史）。ハーバード大学ラドクリフ研究所所属 Schlesinger 図書館（アメリカ女性史関連の資料を蒐集する図書館であり、ジェンダー研究施設でもある）初代館長、およびアメリカ歴史学会会長などを歴任。

主な著書として、Cott, Nancy F. (2000) *Public Vows: A History of Marriage and the Nation*, Harvard University Press. 他多数。



ご寄附のお願い

GRLは、ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、フェミニズム、ジェンダー研究に関わる図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集・保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々にご利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことをめざしています。

GRLのようなジェンダーをテーマとした研究活動施設は全国的にも珍しく、その個性的でユニークなありかたは、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献しうる大きな可能性を有しています。GRLがジェンダー研究を深化させ、その成果を社会に還元できる知の拠点へと成長していくためには、文献、史資料を散逸させることなく、蒐集、保存、整理し、広く提供できるライブラリ、アーカイブの存在が不可欠です。

GRLが、先人たちの知の営みを次代に継承していけるよう、みなさまのご支援を賜りたく、お願い申し上げます。ご寄附金等をいただける場合には、こちらのメール (grl@adm.nagoya-u.ac.jp) までお知らせ下さい。



GRL 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
Gender Research Library Nagoya University

お問い合わせ：grl@adm.nagoya-u.ac.jp

電話：052-789-5111（代表）

アクセス：〒464-8601 名古屋市中千種区不老町

地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分